

震災復興の始まり 一年たった今考える

宮城大学食産業学部准教授 森田 明

東日本大震災からようやく1年がたった。あの時の慌てふためき混乱していたことが今も昨日のように思い出される。だが、仙台の街中にいると、あの時が夢であったかのような気分になる。復興需要もあって人々の行きかう繁華街はこれまで以上の賑わいを見せている。町に残された傷跡は懸命に修復され、ほとんど見かけなくなった。が、それでも少し離れると、今なおブルーシートの掛けられた家屋や液状化によってデコボコになった街路に出会う。被災地でも被災の跡がかくもわからなくなっているのだから、被災地ではない地域にあっては、東日本大震災の「思い出」は次第にリアリティを失い、過去の出来事になっている可能性は想像に難くない。震災によって惹き起こされた原発事故による放射能汚染の不安は、次々に明らかにされ拡大していく被害に活目せざるをえないのに対し、そうではない震災による復興は、その報道から察するに、日々に新しく、着々と復興している様子がうかがえる。曰く、漁港整備が進んでいる、曰く、銀鮭の水揚げが開始された、曰く、水産加工施設が建った、曰く、地元商店街の仮設店舗ができた、曰く、除塩作業によって今年は被災した農地の約4割で作付けが可能になった・・・ともかくも報道は、復興によって明るい兆しを次々と伝えてくれる。それはまったく当然のことだ。あれほどまでに深刻な事態を日本国中に伝えたものだから、日本国民の大勢は、その心配から現地の回復を祈り、その報道に期待を寄せている。だから、その期待に応えて、少しの「兆し」でも日本国中に配信する。地元の私たちもまたその報道を聞いて胸をなでおろしつつ、現地の調査にでかける。

すると、どうだろう、現地は多くの場合、報道から受ける安心感とは程遠い状況であることにしばしば出会う。漁港周辺は、建物もなにもない更地のまま、地盤沈下したままであり、当面、水揚げも仮設の施設で行っているという。水産加工施設の本格着工は、復興計画上の土地利用が決定されていないから進まないという、仮設の店舗はできたものの、し

かし、町作りはどうか将来が不安だという、農地は確かに除塩できた土地から作付けを行うが、海岸に近い部分については、宅地等の移転や圃場整備のために住民とまだ話し合っている最中であるという、完了するには10年近くを要する

か・・・現場に赴くと、その光景を目の当たりにし、いまだ復興の始まりにいることに気がつく。復興できるところから復興を始めている、そのことで既に復興が本格的に始まったかのように思ってしまうのだから。だが、まだまだ。目の前に、山のようにうず高く積みれ、遥か向こうまで連なった震災の瓦礫がそのことを雄弁に物語っている。

復旧と復興の違いについては学生たちもすでに心得て、敏感である。しかし、復旧にしる復興にしる、その過程の緒口はいずれも同じで、今ようやくたどり着いたというのが実感である。昨年一年は、ともかくも事態を把握し分析し当面の対応を考えることに終始した。できるところから始めた。なにより希望を繋ぐためだ。これからが本番である。復興に向けての多くの困難がこれから待ち受けているだろう。坂口安吾が、戦時中の同胞愛に満ちた理想的な人間の振る舞いに対して、戦後のやみくもな生き方を堕落と反語的に表現し、その堕落の中にこそ人間らしさがあると賛美した。これからの復興に待ち構えているのは、このことであり、しかし、それこそ普段の人間の姿である。困難があるとすれば、それは、震災前に、そこで生き生活してきた人間の中に困難が存在していたのだ。そして、それを乗り越えてこそ復興なのだろうと考える。日本全体としては、震災は地域の限られたもの、もはや復興が果たされて安心できているもののように考えられているかもしれないが、しかし、現場にいる人たちの復興に向けての本格的な挑戦は、これから始まる。

